



熊本地震での避難所体験を聞く

9月21日には、数年前まで高知で教員をしており、地元熊本に帰られた後に熊本地震に遭われ、被災体験をした益城町の益城中学校の二子石先生にリモートで避難所生活について体験談を聞かせていただきました。

実際に被災体験された先生の話には臨場感や緊迫感があり、子どもたちにとって新たな気づきがたくさんあったようでした。



一瞬で街の様子が一変してしまった様子を聞き、芸西村もそんなじゃないか？という思いをもったり、学校再開までの一ヶ月の大変さ、被害の様子、避難所の様子を学び、公助とその限界を知ったりすることができました。子どもたちはめっちゃ大変やん！と思ったことを口にする場面も何度もありました。避難所であっても、すぐにはダンボールは間に合わず、床で寝ることになり、背中が痛いということ、仕切りがなく、プライベートがないきつさ。みんなに見られているのはしんどいということ。そして、アルピニストの野口健さんからテントが大量に支給されたことなどを体験していないとわからないことをたくさん教えてもらいました。当たり前のことが当たり前ではないということを知りました。

そして、二子石先生は、備えがなかったため、大変な思いをしたことを聞き、備えの大切さを改めて考えました。

避難所では、運動不足の問題に対し、中学生発案のラジオ体操や運動会にお年寄り招き、一緒に競技したことなど、どうやって辛い時期をみんなで乗り越えるかを考えることについても知りました。

そして二子石先生は妻が避難所生活中に出産したこと。車中泊して病院へ行ったことなど、個人的な苦労についても知りました。

病院も揺れてること、食べ物飲み物ない状態。

そのような中で、いつでも助けてもらえる公助を得られるとは限らないということを知りました。災害に3つの助は大切。自助公助、共助の大切さを確認するとともに自分を守る大切さ、準備の必要について学ぶことができました。

